

## 新潟市潟環境研究所 第5回月例会議（概要）

日時：平成26年9月17日（水）午後3時～午後5時

場所：新潟市役所第1分館101会議室

### ■会議概要

#### 1 開会

#### 2 報告及び情報提供

「夏期特別講座～越後平野の分水路，用水路，干拓地めぐり～」について報告（潟環境研究所事務局）

「第17回福島潟自然文化祭」について（北区地域課）

「とやの物語2014」について（潟環境研究所事務局）

#### 3 講義

##### その1「芦沼から田園都市へ」（藤井 大三郎/都市政策部，田園まちづくりアドバイザー）

- ・ 亀田郷は信濃川，阿賀野川，通船川，小阿賀野川に囲まれた，約1万haの地域である。現在でもこの地域は3分の2が海拔0m以下であり，鳥屋野潟も海拔マイナス2.5mに保たれている。今でこそ日本屈指の美田を誇る亀田郷も，昔は「芦沼」「地区にない湖」と呼ばれ，水害の多い，水浸しの大地であった。しかし，昭和16年に亀田郷の本格的な土地改良事業が始まり，昭和23年には，東洋一と言われた栗ノ木排水機場が完成，亀田郷は広大で緑豊かな大地へと変貌した。
- ・ 土地改良事業の成果により，農業生産性の向上，農村環境の保全，洪水防止などの公益公共的役割の促進，豊かな都市近郊農業が確立された。
- ・ しかしその一方で，昭和30年代後半から急速に都市化したことにより，水質汚染が進み，生物が生息することができない水路になってしまった。現在は「亀田郷環境再生構想」を打ち出し，排水路等の土地改良施設の更新にあたり，水質浄化や景観保全，生態系保全等の環境保全機能を付け加えた，土地改良施設の多面的機能の発揮を図っている。
- ・ 新潟市は現在，全国有数の広大な農地等の農業資源と高次都市機能を活かし，これらが調和・共存する「田園型政令市」の実現を目指している。例えば，新潟市は平成19年から，全国で初めて「環境用水」の水利権を取得し，水路の浄化や水辺の親水性向上，動植物等の生息・生育環境を保護・保全することを目的とし，非かんがい期に亀田郷地区の水路等に水を流している。環境用水導入後，流入経路のほぼ全地点で環境基準を概ね達成し，排水路で希少な生物種（メダカやヤリタナゴ）を確認することができるといった効果も表れ始めている。また休耕田を湿地として再生させたり，魚道を設置したりするなど生物多様性の保全につながっている。
- ・ また，地域資源管理として，農業水利施設におけるストックマネジメント（農業水利施設の定期的な機能診断を行い，既存施設の有効活用や長寿命化を図り，ライフサイクルコストを低減するための技術体系及び管理手法）の導入，農地・水・保全管理支払交付金を利用した農業用水や農村環境の保全を行っている。
- ・ これらの土地改良区を中心とした日本の灌漑管理システムは，世界的にみても地域住民の参加型管理の模範として評価されており，青年海外協力隊（JICA）などを通じた技術協力の中でも主要な分野となっている。

## その2「潟の歴史について～佐潟を中心に～」

(太田 和宏 研究補助員/赤塚中学校地域教育コーディネーター)

### <佐潟について>

- ・佐潟（さかた）は約 2000 年前に原型が形成された。約 1500 年前、まだ越後平野の一部に内海が広がっていた頃、その内海と佐潟の一部がつながっていたと伝えられている。伝承には、赤塚坂下から沼垂まで船で渡した「七里の渡し」が伝わっている。また、佐潟には海賊船が眠っており、今もそこだけハスが生えないともいわれている。高度経済成長期までは、佐潟の潟縁に田んぼがあり、稲作が行われていた。
- ・明治 32 年の「官有沼池二関スル綴」によると、佐潟は魚類の養殖、鳥の狩猟、蓮根の生産といった、重要な生業の場所として紹介されており、生物多様性の重要性も同時に記述されている。

### <乳の潟について>

- ・赤塚地域には、明治時代まで 3 つの潟があり、用水溜として近郷集落に必要とされていた。その 3 つの潟は、佐潟、御手洗潟（みたらせがた）、そして現在はなくなった乳の潟（ちのがた）である。乳の潟は赤塚の大庄屋である石黒家によって新田開発されたが、宝暦 11 年（1761 年）には、代官所の指示で原形に戻すように言われ、この指示で石黒家は乳の潟を元の水域へ戻すことになった。そして文政 3 年（1820 年）、新川掘開通により、悪水抜きが容易になることを受け、再び石黒家による乳の潟の新田開発が行われた。しかし、いったん乳の潟を元の水域に戻した際、新田開発での事業費の他に堀上げ費用も負担していた石黒家は資金繰りに困り、水原の市島次郎吉へ質入金として資金を受けた。これを中原藤蔵が、赤塚の住民が関われなくなることを避けるため、資金援助を申し出た。その後文政 11 年（1828 年）、市島氏に代わって中原藤蔵が新田開発を行い、その名前をとって「藤蔵新田」と呼ばれるようになった。

### <御手洗潟について>

- ・御手洗潟は佐潟の北側にある潟で、名前の由来は、御手洗潟の北側にある船江神社（現・神明社）に参拝する折、この潟で手を洗い清めたことからである。船江神社は、延長 5 年（927 年）の『延喜式神名帳』に、式内社として赤塚の船江神社が記述されている。また、徳川光圀編纂の『大日本史巻 256』には「船江神社、今在赤塚駅、称船江神社」とある。御手洗潟の水利権は、木戸新田村（現・木山）が保有し、漁業権は赤塚村にあったが、この水利権で江戸時代、度々赤塚村と木戸新田村で水論（水争い）が起こった。

### <ドンチ池について>

- ・ドンチ池は本来「論地池（ろんちいけ）」と呼ばれており、赤塚地籍である。論地とは、江戸時代に赤塚村と内野村との水論をめぐって議論をしたところから始まっている。別名では「尼池」「グラウンド池」とも呼ばれている。ドンチ池には尼寺が沈んでいるといった伝説や、幽霊・河童伝説がある。
- ・ドンチ池は砂丘湖であり、水源は地下水から成り立っている。そのため、大干ばつや日照りがあったとしても、ドンチ池だけは涸（か）れなかったといわれている。